

古文を読む 〜枕草子〜

今回の学習のポイント

- ① 『枕草子』について理解する
- ② 『枕草子』を読む

『枕草子』について理解する

今回の学習で取り上げる古典の随筆、『枕草子』について確認しておきましょう。

■作者 清少納言（せいしょうなごん）

九六六年ごろに生まれ、一〇二〇年代に没したと考えられています。本名は未詳で、清原姓から「清」（父は清原元輔という有名な歌人）、家格を表す「少納言」を合わせて「清少納言」と言われています。

結婚、離婚などを経て、二十八歳のときに一条天皇の中宮（天皇の妃）である定子のもとに女房（中宮の身の回りの世話係、教育係）として仕えました。知識、教養が豊富で頭の回転も早かった清少納言は、宮廷生活の中での知識人との交流も多く、そのすぐれた才能を発揮し活躍しました。

■成立 平安時代中期

初稿本は九九五〜九九六年ごろにでき、以後加筆されて一〇〇一年ごろまでに完成したと考えられています（諸説あり）。

■内容 全体で約三〇〇段からなる随筆

その内容から、以下のように分類されます。

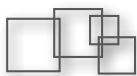
●類聚的章段……「ものづくし」などとも言われ、「〇〇といったら□□。」の

ように、対象となる物や事柄を列挙したものを。

今回学ぶ「かたはらいたきもの」もこれに該当します。

●随想的章段……自然や人事等に関する所感を記したものを。

●日記的章段……宮仕えの体験や見聞を回想し記したものを。



国語監修・執筆

中澤 匠吾

『枕草子』を読む

1 「春はあけぼの」

〈本文〉

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山際すこし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。 …後略…

〈現代語訳〉

春はあけぼの（がよい）。段々と白くなっていく、山際が少しづつ明るくなって、紫がかかった雲が横に長くただよっている様子（は、たいそう趣がある）。

〈内容〉

この段では、四季の趣がどんなところに感じられるのかを、それぞれの時間帯と情景に注目して述べています。四季折々の自然の風物、情景描写に、清少納言独自の鋭い感性を垣間見ることができます。

番組では冒頭の「春」についてのみ取り上げていますが、本文では春に次いで、夏は「夜」、秋は「夕暮れ」、冬は「つとめて（＝早朝）」がよいと述べています。具体的にそれぞれのどんな様子に心がひかれるのか、各自で作品本文に触れる機会を作り、確かめてみてください。

2 「かたはらいたきもの」

〈本文〉

かたはらいたきもの。よくも音弾きとどめぬ琴を、よくも調べて、心の限り弾きたてたる。客人などにあひてもいふに、奥のかたにうちとけ事などいふを、えは制せて聞く心地。思ふ人のいたく酔ひて、同じことしたる。聞きるたりけるを知らで、人の上言ひたる。それは、何ばかりの人ならねど、使ふ人などだにかたはらいたし。 …後略…

〈現代語訳〉

そばにいて気恥ずかしく居たたまれない気がするもの。十分に上達もしていない琴を、あまり調律もしないで、自分の心ゆくまで弾き鳴らしている。客などに会って話しているときに、奥の方で（人には聞かせられないような）内輪話をしているのを、止めることができずに聞いているときの気持ち。愛する人がひどく酔って、同じことばかり繰り返している様子。（本人が）聞いているのを知らずに、その人のうわさ話をしている。それは、それほど自分の人でなくても、たとえ召し使いなどでさえも居たたまれない思いがするものだ。

〈内容〉

日常生活の中で感じられる、「居たたまれないような思い」になる事態について列挙しています。

周囲をかえりみず本人だけが満足している状態、はたから見ればまずい事態なのは明白なのに、当人がそれに気付いていないことに気をもむ様子など、共感するところもあるのではないかと思います。主観にもとづく言動とそれを冷静に見つめる周囲の視点とのギャップが、「気恥ずかしさ」をうむようです。

まとめ

『枕草子』は、古典の随筆文学の代表的傑作です。作者、清少納言の鋭い観察眼や機知に富んだ言動には優れた才能、知性を感じられ、描写、表現も秀逸です。古文の作品については、どうしても読むことに難しさを感じたり、意味を調べ確かめていくことに抵抗を感じたりすることがあるかもしれません。しかし、書かれている内容そのものは決して難解なことばかりではなく、むしろ現代の私たちにも共通するような思いが語られ、身近に感じられるということも多いのです。現代語訳から読んでみるという方法も、古文の世界を知っていくためには有効です。今回の学習を、さまざまな作品に親しんでいく第一歩にしてみてください。